

No. 34	昭和49年6月31日発行 編集者：後藤光男
ねじればね	〒592 大阪府高石市高師浜2丁目4-4 電話 堺(0722)61局5374番
May, 1974	日本昆虫学会 〒658 神戸市東灘区御影町天神山46

## カルトンボックスと標本箱名箋

後藤光男

「昆虫と自然」に連載された中根猛彦博士の「欧米の自然史博物館を訪ねて」を拝見して、その(3)(1972 第7巻第8号16頁22行目)に大変なつかしい言葉が目にとまった。それはカルトンボックスという言葉である。今大阪の甲虫屋は志賀昆虫普及社のインロー型甲虫専用ガラス蓋式の標本箱を使っているが、その昔はほとんどカルトンボックスと称した標本箱であつた。現在では空襲で焼けたり又買替りため処分されたのか、この標本箱はあまり見ることもないが、何かの機会に偶然見付けた時は大変なつかしく、これを持つていた当時がつぎつぎと思い出される。

本来カルトンボックスとはボール板の箱と解釈される。当時我々の間でカルトンといえば標本箱の代名詞的存在で、その保有数を競いあつた。その頃の百貨店や用具専門店でもこのカルトンボックスはまったく販売されていなくて、桐箱・紙レザー・コルク板・巻紙・掛金・方眼紙を別々に買求めて標本箱に組上つたものである。

カルトンボックスに皆が飛びついて急速に拡がったのは大きさも重さも手頃であつて、ブック型であるため本箱に縦に並べても映りよく今でいうカッコ良さが皆の心を引き付けたからで、矢野由雄氏の影響に負うところが大きい。それは矢野氏が交際された神戸のJ. A. E. Lewisの標本箱はすべてカルトンボックスであつたところから、同氏がこれに似せて作られた標本箱を我々が真似たのに外ならない。後年阿倍野の横山研究所でも需要を当てこんで製造販売していたが、中仕切板のみ厚ボール紙を使いほかは堅木材のため重かつたのと、外貼の紙レザーの色がすつきりしなかつたのか、我々の仲間での利用者はなかつた。

我々が重宝したカルトンボックスはインロー型標本箱の背の一方を布片で留めて、外側はすべて紙レザーを貼つたブック型で、部品を専門店に買求めてよく標本箱作り時間にかけた。

まづ桐箱であるが、当時の大阪では書画骨董や高級装身具の外箱はほとんど桐材製で、箱造の指物師も多かつた。河野洋氏は友達のお父さんが太融寺の指物師であつた関係からか同所を利用され

たそうだが、私は南海電車難波駅に近い指物師に頼んだ。その頃私は西区靱に家があつて難波から市電・バスどちらでも持運に便利であつた点と、この指物師は大変人のよい親父さんだつたから、私だけでなく他の人達も皆この指物師の許に足を運んだ。

我々が頼んだ桐箱の寸法は縦19.5cm×横26cmで蓋箱2cm・底箱4cmの高さをもつたインロー型であつたが、故永富一雄氏は30×40×6cmの大形をも頼んでいた。現在残っているカルトンボックスの小型には2種あつて、ほとんどが指定寸法の標本箱だが、他に僅かに小形で厚みがあり蓋箱の厚さが1.5cmと浅い標本箱がある。これはこの指物師が造った高級ハンドバッグ用の桐箱が寸法違いであつたのか、間屋からキャンセルされて持余してゐたのを助けるため標本箱に代用させたもので、指定寸法は1箱が50銭であつたのを35銭にまけて呉れた。この2種以外に見られる寸法違いのカルトンボックスは、違った指物師に我々の年代以降の方々が頼まれたものである。

紙レザーを買つたのは東区谷町3丁目にあつた泉という家で河野洋氏の兄さんの学校友達であつたとか、電車道に面した北側の軒先の低い薄暗い店であつた。入口を入ると右手の片隅には紙レザーを高く積みあげて、その奥に絞押出機を置いていた。紙レザーは模様と色の種類が大変多くて、その好みがマチマチで一部の人には好かれなかつたが、私はワニ皮模様が好きであつた。その背模様の豪華さが他の人達からも人気を受け積みあげられたストックから特に立派なのを奪い合つた。初めの頃は紙質・塗料とも特によくて箱貼しても仲々立派だったが、戦争の激化にしたがい紙質も悪くなり色も違ってきて、糊貼すると模様が延びきつてしまつてガツカリしたものである。

コルク板は厚さ1分で2尺×3尺のものを城東線の京橋にコルク工場が集中してゐたので、国鉄片町線より歩いて買いに行った。

巻紙は文房具店で手工用(今の工作)に売つてゐたから、3耗目方眼紙と共に容易に手に入つたが、巻紙も純白紙からだんだん粗紙となり灰色に近い色紙にかわつていった。

掛金は何処で買ったか記憶にないが小さくて薄いのがなく、あちらこちらの金物店へ足を運んだが仲々見付からなかつた。当時買った掛金が手許にあるが今はまったく見られない。

これらの材料を貼る糊は今のよう短時間に乾き強力な密着力をもつ合成糊はまったくなかつた。当時の糊材はニカワかソツクイが主で事務用の瓶入フエキ糊が高級であつたが、これでは可成り高くつくから主に八百屋で売られていた洗濯用の糊を用いた。八百屋に器を持参すると店先に置かれた一斗樽の水の中から糊の丸塊をシャモジで抱きあげて水ごと器に移して呉れた。糊の計り売もあつたがこれは竹の皮に包んで呉れた。初めは良質であつた糊も紙製品と同じく後になるほど粗悪となり、後日カビになやまされた人もあつた。

カルトンボックス型の標本箱を仕上げるのに私はつぎのように作業を進めていった。まづ桐箱の底にコルク板を貼りつけた。桐箱の内寸法を正確に測つてコルク板を西洋カミソリの刃で切つてもよく端とか隅に隙間ができたからコルク板の細切を埋めこんでゴマかした。コルク板を貼る糊は薄

い目の方が乾くの間に時間がかゝらなかったが、部分的に離れる失敗もあって、濃い目の糊を必要以上に用いたから乾き上げるまで3日以上の日数が要った。又完全に密着させるため単行本を重しの代用に利用したが、あまり持合せもなく辞書まで動員してもコルク貼りは必要以上の日数が要った。

コルク板が貼り終ると艶紙貼りの工程に移った。標本箱の内側はすべて白色とするためにコルク板上の他は白色の艶紙を貼った。底箱は仕切板の上面より下にかけて僅かにコルク板にかゝるだけ貼りつけた。蓋の側面は細切の1枚で貼るのが一般的な貼り方だが、仕切板の方はその上面にも貼る関係から細切の4枚の方が貼り易かった。艶紙は水分を吸うとかなり伸びる特徴を知りながら、初めは急ぐあまり完全に伸びきるまで待たないで貼ったため、乾くにつれてシワになったり、又シワを延ばそうと布片を使って破ったりする失敗も多かった。艶紙は貼って半日もすると乾き上げるので紙レザー貼りへと進んだ。

紙レザーは現在特殊なものを除いて多くはロール巻であるが、その頃はほとんど90×120cmの1枚のものであった。ワニ皮の背模様は1枚の紙レザーに縦に2列ぐらい絞出されていたから先づ特にその背模様の豪華な部分を標本箱の横巾よりやや狭く、蓋の上面から底箱の下面にかけて被る広さを先にとり、残りからへり張用をとった。へり張は標本箱の蓋・底箱とも巾より1cm位を広くとり一面のみその両端に1cm位被る長さが必要であった。この割付の可・不可で紙レザーが必要以上に要るので苦心したものだ。蓋・底箱の側面を貼って乾くのを待つ。乾きあがると標本箱の背面一杯に蝶番の代用として布片を貼りつける。初めは薄い布片がよいというので絹布を使ったが、弱そうなので木綿布に変えた。最後に蓋・底面に紙レザーを被せるのだが、背布が充分乾いていないと背部の密着に思わぬ日数がかゝった。又この背布が充分乾いていても紙レザーの糊を布片が吸い、完全に乾いたと思って標本箱を開くと背部が離れるというようなこともあった。蓋・底箱の接合部には補強のため、その広さの細切を貼りつけて書類バサミで固定して乾くのを待った。当時コルク板上に方眼紙を針止するか糊貼するのが流行した。掛金を背部の反対側に取付るとカルトンボックス型に標本箱が出来上った。余程手際よく事が運べてもコルク貼りから掛金の取付まで10日を要した。

現在は標本箱を昔のように縦にブック形に並べることは少なく、標本タンスを造って引出式とするか本棚に横積されている。これは縦並びだと箱の出し入れの際の衝撃で標本の落下する率が多く、落下による破損防止から横位置が多いと思う。又品名差(標本箱見出金具)とも関係があるようだ。

品名差(見出金具)はこれまで百貨店・金物店でも容易に入手できたが、最近是需要がないためかあまり店頭では見当たらない。使って手頃なのは外寸2.5×5cmの四穴か2×4cmの二穴で、これまでの真鍮製やクロームメッキのものからアルミ製にかわってきた。カルトンボックスの整理は縦並べが常識であると思っており、背開きであるから品名差を背部に横位置で取付けることは不可能で、縦位置に取付けても品名差の厚みの関係から標本箱が完全に開けない欠点から標本箱名箋が利

用された。

今私は手許に数氏の方々が使われた名箋を持っている。数氏の方々共一様にもっとも好きな甲虫を中心に書き、その上部に直線か弧状にCOLEOPTERAと配列し、下部にローマ字で姓名を入れ二重線で枠取してその下に6~8mmの間隔で4~5本の直線を入れた紙片である。尚二重枠の上を箱番号欄としてNo. を刷込んで、この箱番号の樹数を競いあった。甲虫図も筆のたつ人は自分であれこれ構図を考え作画して出来派えのよいのを選んだり、又図鑑や同好会誌からカッコのよい甲虫図を探して複写したりした。しかし私は画がニガ手なので故永富一雄氏に数種書いてもらって、この中からハンミヨウ・シテムシ・食糞コガネムシの3種を選んで名箋に使った。

名箋の欧文書体にも苦勞があった。最初は凸版の知識がなくて図の上・下部に字さえ入れておけば凸版屋で修正し、仕上げてくれるものと思っていたから、鉛筆や黒インクで簡単にCOLEOPTERAとMITSUOGOTOとを入れておいたらそのまま凸版となった。その時始めて原図は完全に仕上げてから依頼しなくてはならないことを知った。レターリングもにが手なので当時活字を買っていた市電本町通の岡崎橋にあった森川龍文堂で大きさも適当でスタイルのよい活字を見つけたが、1文字最底5ヶ売といわれたからあきらめて、矢野さんの方法を真似ることにした、これは外国雑誌から文字を切り抜き綴り合わせる方法でタイプトーンという便利なものはまったくなかった。今は堺筋日本橋界限もすっかり変って電機製品の販売店が並んでいるが、その昔は古本屋と古着屋の街であった。この店頭に並べられた古本の中から外国雑誌を探した。雑誌の内容はいつでもよくて、印刷された活字の必要性から肉太やスタイルのよい大きな欧文活字で印刷された雑誌を見付けるのに苦勞した。うづ高く積まれた古本の中から気に入った活字の印刷された外国雑誌を探しても、その印刷活字から同一書体でCOLEOPTERAとMITSUOGOTOとを切り揃えることは仲々むつかしく、皆も私と同じく苦勞していたようである。完全に仕上げられた原図に文字が原寸大で似合えば問題はなかったが、どちらかを縮小しなければならない場合に製版の同時縮小は不可能なので、原図と文字との大きさの関係は仲々むつかしかった。名箋の紙質は上質白紙で充分と思われたが、なぜかクリーム系統の美術紙に人気があり、刷色も黒色よりも藍色やセピア色が好まれた。出来上った名箋はその箱の収蔵標本の科・族・属名を記入して、背面上部に貼り付けられた。この頃は名箋だけでなく蔵書票も流行していたようである。

現在私が使っている縮刷のデータラベルと磨めてしまった基本標本ラベルとは矢野由雄氏に教えてもらった改良版である。

縮刷のデータラベルについては先に述べた。(本誌No.28, PP3-4・1969; No.29・PP2-3・1970)私も初めの頃には欧文タイプライターで採集地名を印書して亜鉛凸版に縮小したが、タイプライターは活字の間隔が同一であるとその縮刷があまり見派えしなかった点から6ポイントの肉太活字の縮小にかえた。

基本標本ラベルは自分の所蔵する標本の中で基本となる甲虫を表示するため作った1.5×2.2cmぐらいのラベルで、細線の枠内に4～5本の横線を引き一番下の欄内に蒐集者名が印刷されている。伊賀正汎氏が一番早く作ったようで、私も欧文でMITSUO GOTO COLLECTIONと入れて、同定してもらったり同定できた標本の種名を記入して、その虫につけていた。矢野さんの基本標本ラベルにはその左側枠外の下部に横位置でTYPE NO. が入れてあって、針差しするとNO. が標本の頭に表示されるようになっていた。帝塚山のお宅に伺ってゴミムシ等の同定をお願いすると、基本標本と比較して即座に種名を教えられたが、少しく疑い種ではノートで調べられた。そのノートは所蔵標本台帳で基本標本のタイプ番号とノートの種名番号とが一致させてあって、種名・和名・原記載・分布・参考文献・記録等が黒々と書き込まれてあり、このノートが所蔵されているゴミムシ類標本の戸籍簿であった。

この雑文を書くために当時使っていたものを探していたら標本台帳の用紙が出てきた。その頃は食糞コガネムシ類とオサムシに熱中していて台帳に円念に書き込んだ記憶があるので、台帳綴を探したが見当らなかった。出てきた用紙は予備の更紙で第1表と第2表の2種類があって、大阪一宝塚一大垣一四日市一高石と転宅の折に無意識に持運んだものらしい。印刷から通算して可成りの年数が経っていると思われる。この用紙は矢野由雄氏から得たヒントに加藤正世著の「昆虫標本整理法、1933」のヒナ型をアレンジして大倉正文氏と共に考えた未印刷させた共同作品で、刷上りを2等分したと記憶しており、用紙が小形でありながら案外項目が要領よく纏めてあるように思われる。

標本台帳は2種類ともA5版のルーズリーフ式バインダーに綴り込みが便利なよう4穴があけてあり、その第1表には上部に「鞘翅目標本目録」とタイトルを大型活字で刷り込んで、裏面は採集記録の記入欄である。第2表は第1表の裏面の補助用紙として増刷したものであって、表・裏とも採集記録の追加用となっている。タイトル以外はすべて小型活字を使用し、第1表の表面はその右上に標本箱と基本標本を示す番号欄を上・下に設けて、左上は科名を頭に学名・採集年月日・同定者・分布の記録欄がある。用紙の下3分の1は記載の欄で、その左下に4.5×5cmの空白を設けて描画用として、白地としている。裏面はその上部を採集記録の欄として採集地名・採集月日・個体数・摘要の項目があり、下は備考の記入欄としたものである。

基本標本の選定は、その種類の標本が1頭しかない場合は不完全品であつてもその標本を、個体数の多い場合には完全品でしかも整肢してあって種の特徴がよく現われている標本を基本標本として、その詳細を第1面に記録し他は裏面に記録した。後日採集したり交換したり交換によって標本が増えた場合には裏面に追加記録をし、交換のため提供したり卓上採集をされて標本が減った場合には裏面の記録から理由を付記して減少させた。標本の出入が少なければ台帳への書込みは苦にな

らずむしろ楽しかったが、標本の移動が活発になればその書込みも回数が増えてきて、時にその書込みを怠ったりすると標本の出入が判らなくなってしまって、満足なデリバリーも出来ない内に棒を折って止めてしまった。大倉正文氏はこの記録を今日まで克明に続けておられて、その忍耐と根気には敬服している。同氏の標本台帳に記録されているオグラ池・淀川河川敷内・浅香山等は昔日の面影を止めない位変貌しているので、そのゴミムシ類の採集記録は貴重なものと言えるだらう。

## 会費値上げのお願い

当会の会費は長い間、1,000円で据置いてきましたが、印刷費・紙代等の高騰のため、第27巻分から1,500円に値上げさせていただきます。何卒事情ご賢　のうえ、同封の振替用紙より、なるべく早くお納め下さるようお願いいたします。

振替口座番号　大阪39679

## 新入会員

住 所 變 更





死 去



退 会



認 定 退 会





## 昆虫学評論の体裁変更について

長い間一定フォームを続けてきました昆虫学評論の体裁を、第26巻から一部変更いたします。

1. 英文8ボは読みづらいとの声がかかりございますので、主として本文を9ボに改めました。
2. 用紙の値上りで、上質紙とアート紙の価格がほとんど変わらなくなりました。今までは本文を上質紙、写真プレートをアート紙に印刷していましたが、わずか2~3枚の写真プレートを所定のページに入れるだけで製本代が非常に高くなりますので、今回から本文もアート紙に変更しました。

## 宛名カードの新規作成について

会報発送のための宛名カードを、都道府県名を省略して郵便番号入りに作成しなおしました。十分に注意をしたつもりでございますが、万一誤りのあります場合はお手数ながら事務局までご連絡をお願いいたします。

## バックナンバー代金の値上げ予告

バックナンバーの売上げ金は、会報発行費の一助としていますが、第27巻から会費を1,500円に値上げさせていたとしてもなお赤字がでる恐れがありますので、昭和50年からバックナンバー代金を大巾に値上げする予定です。現在の価格は「ねじればね」前号(Na33)に掲載していますので、本年中にバックナンバーをとりそろえられるようおすすめます。

## 転居先不明の会員について

下記会員あての郵便物が差し戻されています。転居先をご存じの方は当会までご連絡いただけます。ばありがたく存じます。

## 昭和47年度収支決算書

( 自 昭和47年 1月 1日 )  
( 至 昭和47年12月31日 )

収 入 の 部	支 出 の 部
会 費 360,350	印 刷 代 342,400
バックナンバー代 76,500	通 信 費 59,415
別 刷 代 12,600	消 耗 品 費 1,100
原色昆虫図鑑印税※ 52,941※	大 会 費 19,520
雑 収 入 11,483	幹 事 会 費 10,179
前 期 繰 越 金 524,461	雑 費 56,870
	次 期 繰 越 金 548,851
計 1,038,335	計 1,038,335

※ 会報発行基金として現在までに繰入れられた印税合計 1,172,705円

## 特別会計収支計算書

( 会 報 発 行 基 金 )

昭和47年	1.	1.	前期繰越金	650,914
			3. 26. 金銭信託収益金 (46. 9/26~ 47. 3/25)	1,221
			5. 20. 40万円貸付信託収益金(46. 11/20~ 47. 5/19)	12,359
			6. 20. 20万円 〃 (46. 12/20~ 47. 6/19)	6,180
			9. 26. 金銭信託収益金 (47. 3/26~ 47. 9/26)	687
			11. 20. 45万円貸付信託収益金(47. 6/20~ 47. 11/19)	12,994
			12. 20. 20万円 〃 (47. 7/20~ 47. 12/19)	6,052
			12. 31. 次期繰越金	690,407

— 文 献 紹 介 —

林 匡 夫 著 「その生態的分布と系統学的関連に特に留意したヒメハナカミキリ属  
の総説的研究 1-4部(1968-1972)(英文)A5、182頁、  
27図版。

- ◎ 第1部 抄録、緒言、方法、分類、図版。 ◎ 第2部 分類、分布(地理的分布)。  
◎ 第3部 分布(生態的分布)、系統学的考察、図版。 ◎ 第4部 研究史、農林業への関  
連、文献、摘要。

配布価格(郵便料金とも) 1-4全揃い 茅1,500 2-4部 茅1,100  
3-4部 茅850 第1部のみ 茅500  
2部のみ 茅350 3部のみ 茅500  
4部のみ 茅350

申込みは直接郵便為替か現金書留にて下記をお願いします。

〒546 大阪市東住吉区矢田住道町804 大阪城南女子短期大学

林 匡 夫 あて

標本用ラベル・ラベル用活字のご要望はありませんか

◎永年の経験から標本箱及標本にマッチするラベルを各種取揃えております。ご照会下されば現物  
見本送らせていただきます。

A	属種兼用(タイプライター印書用)	1枚	5片	1枚につき	7円	
B	〃	〃	5片	〃	7円	
C	属用(科・族共用)	〃	8片	〃	7円	
D	種用	〃	8片	〃	7円	
E	属用(科・族共用)小形	〃	10片	〃	5円	
F	種用	〃	10片	〃	5円	
G	♂♀用	〃	♂♀各14片	〃	4円	
G	♂♀円	〃	♂♀各9片	〃	4円	
H	HOST用	小形	1枚	8片	〃	4円
H	HOST用		〃	10片	〃	5円
I	番号用	小形	〃	16片	〃	4円
I	番号用		〃	16片	〃	5円

J	採集高度表示用	1枚17片	1枚につき	4円
K	灯火採集表示用	〃 17片	〃	4円
L	トラップ採集表示用	〃 17片	〃	4円
M	ベルレーゼ採集表示用	〃 17片	〃	4円
N	樹皮下採集表示用	〃 17片	〃	4円
O	任意表示用(二重線枠のみ)	〃 11片	〃	4円
P	灯火採集・高度併示用	〃 24片	〃	10円
Q	台湾産標本用(二重線枠内 FORMOSA入)	〃 50片	〃	15円
R	届種組合せ(C2片・D5片入り)	〃 7片	〃	7円

郵便送料は20枚について20円です。お送りするとき実費精算します。

○データラベル用4,5ポイント活字取揃えることができます。4段組で小形昆虫にもピッタリです。一揃いセット内容はずきが標準です。

活字 大文字：母音各30本、子音10～20本

小文字：母音各30本、子音10～20本

数字：1・9各30本 2-8・0各20本

記号：.,-( ) ; ; ? 10～30本 ㊦各5本(これのみ6ポイント)

コ ミ：全角  $\frac{1}{2}$   $\frac{1}{3}$  各40本、2号4倍8ケ

器具：活字ケース 1箱、活字押し(5段組)2ケ、ローラー 1ケ

印刷インク等

標準本数では依頼者の好みによる組版のため将来不足する活字がでる恐れがありますから、この概数に依頼者のローマ字化綴・大文字小文字の使用好み・Coll. leg. lgt. や採集月のM a yかVの使い分け等をアレンジして必要本数を割出し整えます。価格はやゝ高額で15,000円内外ですが、手書きでラベルを書く手間は省けます。兵庫県宝塚市滝ヶ平、26.V.1974後藤光男採集をローマ字化して6×15mmにおさめます。お問合せに対して刷上り見本送ります。尚ラベル・活字等についてのお問合せは本部(大倉正文宛)でなく後藤宛にご照会下さい。

— あ と が き —

昨冬の石油危機に端を発した物資不足と異常値上りは前者は解消されたものの物価は高値で落付いてしまった。学会・同好会費も順次大巾値上げされて当座はしのげるようだが、年毎に会費改正をしなければ会報の発行ができないように思われる。用具の価格もカタログ価格は一応の目安にすぎず、虫の採集・研究も高くつくようになった。今后本誌もこの程度の頁数を維持したいと思っている。向暑の折会員諸賢のご自愛を切に祈る次第である(510)